

地学と切手



ルーマニア・絶滅した動物切手

P. Q.

1966年11月25日 ルーマニアで発行された絶滅した動物切手6種のうちの5種である。〔最後の4L：ダイノテリウムは除かれている〕

ここに示された動物とは 一般に植物に対応する動物ではなくて“Animal” 哺乳類または大型動物を意味しているようにも思われる。哺乳類は爬虫類から分かれて最初はジュラ紀に現われたといわれている。それが中生代の終わりから新生代の初めにかけて爬虫類に代って発展をはじめ 世界のあらゆるところに適合して進化して来た。動物の種の数は一口で100~150万種といわれる。哺乳類は動物の分類の上では綱にまとめられているが 全体で約5,000種といわれており 一般にその分布から漠然と考えられている数にくらべて はるかに少ない。

新生代の初めから発展した哺乳類は 更新世の初期(約200万年前)に発達した頂点に達した。巨大なマンモス マストドン 野牛 5mもあった地上ナマケモノなどがいたが ほとんどあらゆる巨大な哺乳類が更新世の後期までに絶滅してしまった。現在生き残っている哺乳類はかつて隆盛をきわめた大哺乳類の残党である。その絶滅は世界の各地においての地域性が顕著であるが

おおむね鮮新世の終わりと更新世の中頃であり さらに最後の絶滅は最終氷期の終わりに起った。

この最後の絶滅には ヒトの作用が大きく働いている。北アメリカで最近の6,000~9,000年前に絶滅した哺乳類には マストドン コロンビアンモス オオカミ ラクダ 野生の馬 アルマジロ バイソン 大ナマケモノ等が算えられる。この外に生息地の縮小した哺乳類は数え切れない。第四紀に日本にも住んでいた象は約3,000年前の殷(中国の昔の国の名前:イン)の時代には中国中部には生存しており 3~5世紀の南北朝時代には 江南にも住んでいたと伝えられている。これらの後期の哺乳類の絶滅に一役を果したヒトも そのみかけの繁栄にもかかわらず 生物的にも生態的にも絶滅に向っているかのようであることは 現在の時点で深く考えてみなければならない問題である。

5b: *Ursus spelaeus* 更新世に中部ヨーロッパに住んでいた穴熊

10b: *Mamuthus trogontherii* メリジオナリス象からマンモス象への中間にあるもので 温帯のマンモスといわれ 更新世中期に生存した。

15b: *Bison priscus* 更新世後期にヨーロッパとアジアに広く分布し 氷期野牛と呼ばれた。

55b: *Archidiskodon meridionalis* 南マンモス(暖帯マンモス)またはメリジオナリス象といわれ 更新世早~前期に生存し シベリアマンモスとパレオドクソドンの両方へ進化して行った。肩の高さが5mという巨大なもの。

1.55L: *Megaceros eurycerus* 掌状に分岐した角をもった大型の鹿(オオツノシカ)で 旧大陸の鮮新世~更新世の草原に分布した。1万年前に滅亡。日本では後期更新世に *Sinomegaceroides yabei* がナウマン象と共伴した。ヨーロッパのオオツノシカの絶滅は角の特殊化を例としていろいろ説明されている。

4L: *Deinotherium gigantissimum* 牙に特徴のある象

ダイノテリウムは 中新世のはじめころから更新世中頃まで生き 牙のつき方の復原の話で有名